熾盛 SIJOU

2026/01
１５３

真宗大谷派　専龍寺報

愚かさとは　自分の体験　自分の知識のみを
絶対的なこととして　生きてゆくことです　みやぎしずか

Foolishness is one's own experience; we live thinking that one's own knowledge is absolute.

専龍寺　御正忌法座

1月２９日(木)　９：３０　おつとめ・御俗姓拝読・法話
１３:００　おつとめ・御俗姓拝読・法話
【おとき　１２：００】
講師　釈大慈前田慈史さん(益田市美都町　西念寺住職)

佛華と慈悲(じひ)

仏様にお供えするお花を佛華(ぶっか)といいます。ご門徒のみなさんからもおたずねが多い事です。

１月であれば、東本願寺の昔の本では、正月には水仙と書かれています。

匂いがきつい、赤がダメなどいろいろ言われますが、現住職は佛華をきちんと習ったわけではないですが、いれてはいけないのは「刺(とげ)と毒(どく)のあるものと、花粉が多い花は避けるとお答えしています。

お華を供えるといいますが、実は極楽浄土の御華を、私たちが荘厳(かざり)をさせていただくということにります

本堂の内陣(阿弥陀さんのおられる正面の間)も、家のお内仏も、仏教の教えや極楽浄土の姿を私たちに見えるようにしたものです。

一番私たちに近い場所にあるのが、灯明(とうみょう)、香(こう)、佛華(ぶっか)です。灯明は、阿弥陀仏の智慧の光、佛華は、阿弥陀仏の慈悲、香は極楽浄土の世界を現わしています。

お香は、線香をもちいますが、その香りで極楽浄土の空間を作り出します。インドから伝わった文化の影響も多くあると思いますが、香りは教えの広がりを意味しているとも言えます。

お華は、阿弥陀仏の慈悲を私たちに現わしています。慈悲というのは、字のままのように、私たちを慈しみ、悲しむ心を言います。

もともとのインドまでさかのぼれば、「慈」はマイトリーといい、思いやることや、他を安楽にしたいという言葉です。

また「悲」はカルナといい、うめくという言葉です。

うめくというのは、現代の私たちでいえば、「ああ」とか「おお」とか言葉にならない言葉です。

心底、痛いとき、悲しいとき、私たちは言葉になりません。ここが痛いあそこが痛い、私は悲しいなどと言葉に出たときは、もう自分の中で受け入れることができた言葉です。

受け入れられず、うめきつづけるのです。そのうめきを阿弥陀仏がみて、共にうめいているのが、阿弥陀の慈悲です。

これは、ある子の姿から教えられた事ですが、「ぎゅっと抱きしめ、いつでもどこまでも、ずっとここにいるよ」ということが、阿弥陀の慈悲だと、最近私は、お話しています。

子が外であそんでいる姿や親などの姿を見ると、阿弥陀の慈悲の姿がおもいおこされます。

離れて遊んでいても、子は不安になったり、転んだり、不安や危機になると親などの所に戻ります。そして抱きしめられ安心し、また遊びに行きます。あるいは自分の見る暖かいまなざしにきづくだけで安心します。子の遊びは、人間社会に生きている原点でもあると思います。

やさしく、あたたかいまなざしで立ち続けている阿弥陀様の慈悲の心が、お華として現わされています。

そして、お華には、つぼみ、満開、散り始めがあるとよいとお聞きした事があります。これまでも、今も、これからもずっと私を抱き続けていることの表れでもあります。

阿弥陀仏のはたらきを親鸞聖人は「にげていくもののあとをおいかけつづける」とのこされました。

阿弥陀様に背を向け、わが身の愚かさに気づくことから逃げていくような人生ですが、そんな存在をもあきらめず、いやがらず、信頼し待ちつづけるのが阿弥陀仏です。

兵戈無用(ひょうがむよう)

泉　惠機（いずみ　しげき）

これまでこの言葉は、日常生活の中でほとんど用いられてはこなかったかもしれない。最近になって時折見かけるようになった。“武器も軍隊もいらない”という意味である。浄土三部経のひとつ『大無量寿経』に出てくる言葉である。釈尊が悪を戒め信を勧められるところで語られるのだ。この背景には「不殺生」「殺すなかれ」という釈尊の思想がある。

釈尊の時代にも戦争はあった。大規模な戦ではなくとも、人が人を傷つけ、武器を持って殺しあうのは人間の最も愚かな行為でありながら、絶えることがない。そのような人間の有様のただ中で、釈尊の世の祈りを示す言葉として語られたといって良いだろう。

この言葉を聞いて、誰の心にも思い合わされるのは、昨年九月の「同時多発テロ」事件と、その後のアメリカによるアフガンへの空爆である。多くの命が奪われ、また今も奪われ続けている。自らの命を「兵戈」と化し、また先端のテクノロジーを駆使した「兵戈」を用いて、殺戮が行われている。そして世界は、それをとどめる術をもたないかのごとくである。しかも、いずれも「正義」を謳って「兵戈」を用い、殺戮が正当化される。しかし、いかなる事情があろうと、幾万言ついやそうと、何人も命を奪うことを正当化することはできない。また同時に、多くの戦争が「自らに正義あり」として行われたが、殺戮することに冠せられる「正義」はない。

幾たびもの戦争が繰り返された二十世紀に対して、二十一世紀は「平和と人権の世紀」であることが強く願われてきたにもかかわらず、最も愚かな行為によって幕を開けたことを悲しまざるを得ない。

またこの状況を見ると、『法句経』の次のような言葉が思い合わされる。

この世において、怨みに報いるに怨みをもってすれば、ついに怨みは息（や）むことがない。怨みを捨ててこそ息む。これは永遠の真理である。

今こそ、「兵戈無用」という釈尊の願いを心に入れて生きていきたい。

２００２年『文藝春秋』

（石西組）東本願寺　参拝案内
帰敬式（法名をいただく）

東本願寺で法名をいただきませんか。お釈迦様の弟子となる法名（釈〇〇）は、亡くなってからの名ではありません。

大地にたち、この人生を生きていく名前です。住職も一緒にまいります。詳しくは、チラシをご覧ください。

日時　2026年4月5日（日）～7日（火）
　　京都で集合解散可
交通　乗用車またはJR利用
宿泊　東本願寺同朋会館　人数10人

年忌のご案内
本山相続講金のお願い

【年忌案内】

年忌ご法事のご案内を個別にお送りしていますので、ご確認ください。

連休、土日、祝日など込み合いますのでお早めにご相談ください。

【本山相続講金のお願い】

別紙ご案内の通り、本年度もご本山、宗派より、専龍寺へ御懇志の依頼がまいりました。諸般厳しいと存じますが、お志をお届けいただきますようお願いいたします。

今月の言葉より

絶対的なこととして生きてゆくこと～愚かさのなかで～

「愚禿釋親鸞(ぐとくしゃくしんらん)」が、親鸞聖人の姓名です。法名である釋親鸞の前に「愚禿」と２字をおかれました。

お釈迦様の弟子として、法然上人をあおぎ、念仏道を歩む人生でした。「愚禿」と名のならずにはおれない親鸞聖人の心底が現れたものだと思います。

この「禿」とは、出家した僧のように髪を剃った姿でもなく、髪を結いととのえ姿でもない姿のことをいいます。

聖人は、念仏禁止とともに越後への流罪を朝廷から命じられ、朝廷国家に認められた僧ではなくなりました。しかし仏道をすてたわけではなく、「僧にあらず俗にあらず」「禿の字をもって姓となす」と、人生を尽くされました。

私たちも、これまでの人生は戻ることも、変えることもできませんし、その経験や体験が今の自分をつくっています。

これまでの人生は間違いがなかったと比較し、正当化、正義化していくならば、これまでもこれからも、気づかぬままに、誰かを傷つけていくことにもなるでしょう。しかし、そうした自傷傷他する自分が、真実の自分だと教えられるのは、念仏申した結果なのです。その真実の私の姿から、逃げずそらさずに生きたのも、親鸞聖人でした。

いつまでも「愚かさ」に気づかされていくのが、浄土真宗の仏道であり、南無阿弥陀仏を申す身だ教えられています。

愚かさに気づくというのは、この大地に、この人々とともに、今生きていることが、はっきりするということしょうでしょう。それは、闇ではなく、愚かな自分にまで、あたたかい光の世界が今届いている証なのです。

熾盛(しじょう)

熾盛とは、火が燃え盛る様子をいいます。

阿弥陀仏のすがたは光明熾盛とあらわされ、その願いは、罪悪深重・煩悩熾盛の衆生をたすけんがためと説かれています。

人は、つながりのなか、気づかぬままに、はてしなく罪悪を重ね続け、いまここに生きています。

その存在を悲しみ、慈しみ、寄りそい、ともにあろうとし続けるはたらきを、「阿弥陀」といいます。

専龍寺HP　　東本願寺HP

発行日　２０２６年1月1日
発行者　専龍寺
〒699-3671
島根県益田市津田町５６１
Tel･fax０８５６－２７－００２０
mail:iwamisenryuji★gmail.com

★は＠マーク